

「ねえ、前と後ろを同時に責められるのって、気持ちいい？ ご主人様にオマ×コを愛してもらいながら、アナルを指で苛められるの、感じちゃう？」

「や、やめてください……あつ、そ、そんなに奥までなんて……あつ、ダメ、乳首とお尻と一緒に苛めないでください……あ、あッ、いけません、こんな……あつ、ご主人様まで……あああッ！」

音々に胸を、紗耶子にアヌスを、そして勝に秘肉を同時に責められては、さすがの由佳里も抗^{あらが}うのは不可能だった。しかも勝との行為で、達する直前の肉体である。決壊するのは、もはや時間の問題だった。

「あつ、ああつ、はあつ、あッ、あッ、んんっ！ ダメ、イキます、こんなのダメなのに、由佳里、イカされますっ!!」

音々に吸われた乳首がさらに膨らみ、いつの間にか二本に増えていた尻穴の指をぎりぎり締めつけながら、由佳里が達してはならない領域に向けて飛翔をはじめ。

(ダメ、勝様の前でこんなはしたない姿を見せてはダメっ！)

それでも最後の抵抗を試みるのは、由佳里の、筆頭メイド（ただし自称）としての意地とプライドだった。

けれど、それすら打ち砕く最後の刺客^{しかく}がまだ目の前に残っていた。

「なによ、由佳里さんったらしっかり感じてるじゃない。筆頭メイドも、大したこと

ないわね……あつ、あん！」

「み、美沙さん……っ」

美沙は勝に口での奉仕を強要しながら、ゆっくりと顔を由佳里に近づけてきた。

改めて見ると、音々は由佳里の胸に顔を埋めながら勝に指で秘所を掻き混ぜられているし、背後の紗耶子も由佳里のアヌスをほじりながら、勝の足の指を使って勝手にオナニーをしている。

ベッドの上では、壮絶かつアクロバティックな5Pが繰りひろげられていたのだ。

「ほら勝、もっとよ、もっと舌を使って……ああつ、イイわ、そう……そのままっづけて……アンタは私の男なんだから、ちゃんと気合い入れて気持ちよくしなさいよねっ」

「お兄ちゃんの指、気持ちイイですう！ あつ、そこ、そこコリコリっしてるの、感じすぎちゃいます！ はん、あん、ああん！」

「ご、ご主人様の足が、オマ×コに突き刺さってますっ！ あ、入っちゃう、オマ×コ、足の指で犯されちゃいます！ ああ、素敵です、ご主人様のお仕置き、最高ですう!!」

新婦メイドたちがもらす淫らすぎる喘ぎ声が重なり合う。

「んふふ、もう試験なんて関係ないわね……ほら、由佳里さんも一緒に……ね、私た

ちと一緒にイコ？ 勝もそろそろ……あ、ン……イキそうだし……ね？」

「美沙さ……んんっ……！」

なにか言おうとした由佳里の唇が、美沙のキスで封じられる。

（美沙さん……あつ、美沙さんの舌が……っ）

女性の柔らかな唇とぬらりとした舌の心地よい感触に、由佳里の最後の抵抗が蕩け
ていく。

「ダメ、お兄ちゃん、そんなに音々のアソコ、掻きまわしたらダメえ！」

「アッ、イク、イキます！ 紗耶子、ご主人様の足でイッちゃいますう！」

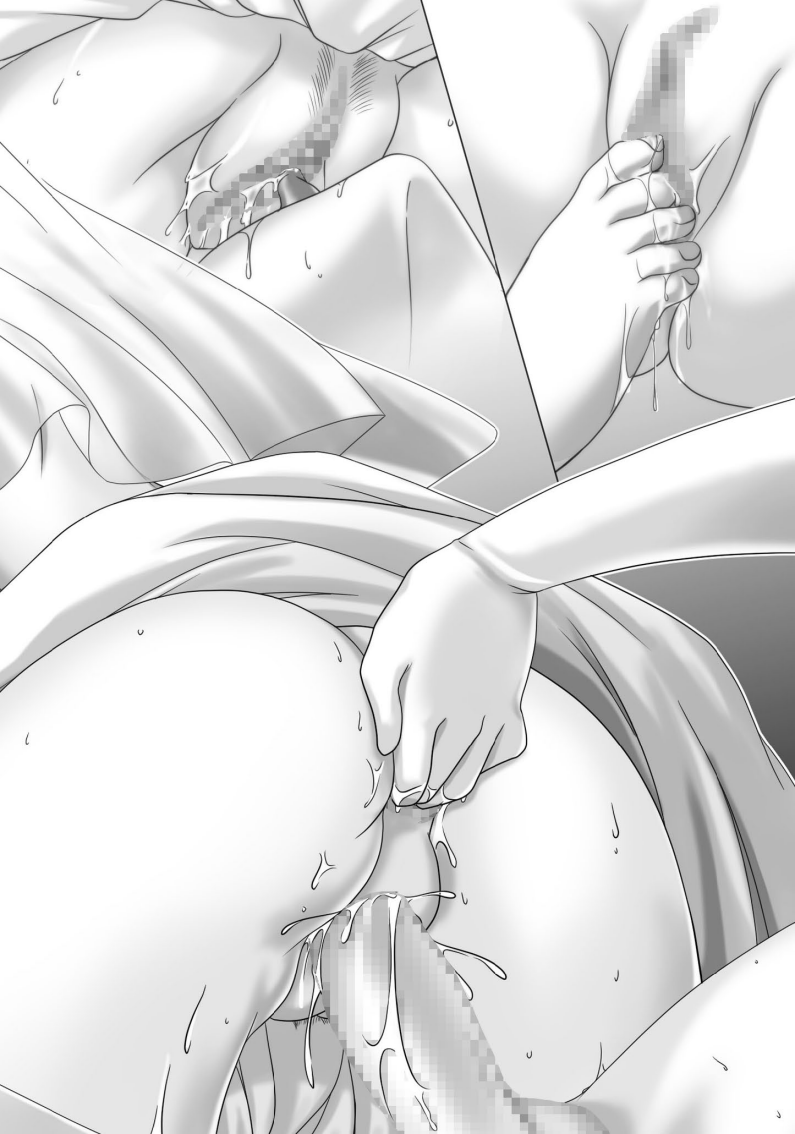
音々と紗耶子の絶頂間近の声^{こゑ}が耳に届く。

由佳里の腰も激しくうねり、愛^{いと}しい勃起肉^{むさぼ}を貪る。蜜壺から溢れでた淫汁が、由佳里と勝の陰毛をべとべとに濡らしている。

「あつ、イク……わ、私もイクわ……由佳里さん、一緒に……みんな一緒にイキましよう？ 勝も私も……みんな一緒に……あつ、ダメ、勝、お豆は嚙んじやダメえ！」

あつ、イッちゃう、ダメ、ホントにダメ……イク……イッちゃううう……ッ!!」

「美沙さん、私も、由佳里もイキますっ！ あつ、ご主人様、くださいませ、奥に、由佳里の子宮に、たくさん出してくださいませえ！ あつ、イク、イク、ダメ、もうイックうううっ!!」





美沙と由佳里がほぼ同時に達するのを見計らったかのように、勝が由佳里の胎内で弾ける。

「ひっ、熱いっ……ご主人様のミルク、子宮に入ってくるっ……あっ、あひっ……くふうううんんん!!」

ぶるん、とその巨大な乳房を揺らして、由佳里が大きくのけ反りながら絶叫する。

「イキます、音々、お兄ちゃんのお指でイッちゃうう……きゅうンン!」

「イグ、イグう! ああっ、あああーっ!!」

少し遅れて、音々と紗耶子も勝の手と足を愛液まみれにしながら達したようだった。

この夜、小坂家の一室の明かりが消えることはなかった。